

**福岡大学
医学会ニュース**

No. 38

福岡大学医学会 福岡大学医学部内



『第1回福岡大学医学会賞』受賞者と医学部長
左から、江本 精氏、相田美和氏、池原征夫医学部長、
住吉慶明氏、長野光之氏

金賞 相田 美和 氏

論文名

Phosphorylation of the Vesicle Docking Protein p115 Regulates Its Association with the Golgi Membrane

銀賞 江本 精氏、住吉慶明氏、長野光之氏

(50音順)

(論文名は4面「福岡大学医学会例会報告」に掲載)

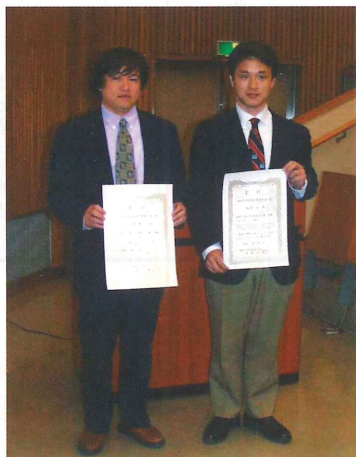
祝

『福岡大学医学紀要優秀論文賞』
『第一回福岡大学医学会賞』

池原征夫医学部長のご提案によつて、昨年度の福岡大学医学部評議員会で、福岡大学医学部賞を設けることが決定しました。賞の対象となる論文は、論文筆頭著者の年齢が発表時に四十歳未満で、前年度に発表された論文ということであり、昨年九月の締切りまでに多数の応募がありました。それから二か月をかけて医学部評議員による査読が行われ、投票の結果、三位と四位が同点であつたので、本年度の受賞者はアイウエオ順で、江本 精氏、住吉慶明氏、相田美和氏、長野光之氏の四名と決定しました。

本年三月三日に第四十回医学部例会が行われ、始めに数年前から設けられている医学紀要優

秀論文賞授与式に引き続いて同賞受賞者である大島孝一氏、城島 宏氏の講演があった後に、福岡大学医学会賞の講演がとりおこなわれました。持ち時間は各十五分、質問五分で、過去最大の出席者数のもとに、甲乙つけがたい熱弁がふるわれました。それに引き続いて、参加者ならびに評議員の投票が行われて、最高得点を得られたのは相田美和氏の「小胞接着因子p115のゴルジ膜への結合とリン酸化による制御」と題する、JBCに掲載されたインパクト・

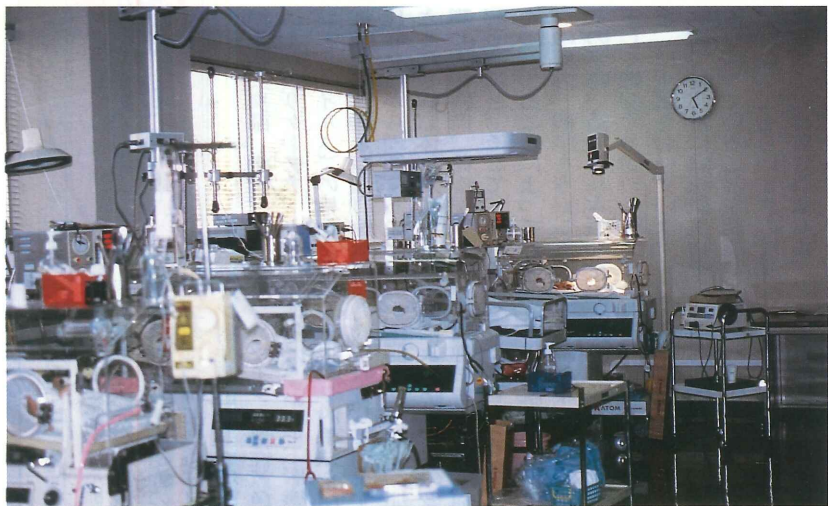
A photograph of two men standing side-by-side. The man on the left has dark hair and is wearing a dark suit, white shirt, and a patterned tie. The man on the right has dark hair and is wearing a dark suit, white shirt, and a dark tie. They are both looking towards the camera. The background is dark and indistinct.

『福岡大学医学紀要第25巻優秀論文賞』
受賞者
左：大島孝一氏、右：城島 宏氏

ファクターの高い論文であり、見事金賞に輝きました。

三月九日には医学部長室で表彰式がとりおこなわれました。受賞者の皆様本当におめでとうございました。

(庶務幹事・金岡毅)



NICU (newborn intensive care unit)

このunitでは集中治療を必要とする新生児を9名まで収容できます。

平成十年十二月、福岡大学病院は福岡県から総合周産期母子医療センターの指定を受けました。

このセンターは国の周産期医療対策事業にもとづくもので、国および県から補助金を受けて運営することになります。福岡県はこの補助金の対象になるセンターを福岡大学病院を指定しました。また補助金の対象にはならないが同様の機能を持つ総合周産期母子医療センターとして、他に久留米大学病院と聖マリア病院の二か所を指定しました。

福岡大学病院は指定にとまなない母体、胎児集中治療管理室、新生児集中治療管理室そ

れぞれ九床、およびその後方病室それぞれ十八床を整備しました。

センターの主な業務は次のようなものです。

- ・ハイリスクの母体、胎児の治療管理、ハイリスクの新生児の治療、育成をおこなうこと。

福岡県の周産期医療の中核として、周産期医療に関する県内の情報を収集し、地域の周産期医療関連施設に対し情報を提供するとともに、適切な受け入れ施設の選定、指示をおこなう。

そのために県内の周産期医療関連施設のネットワーク

総合周産期母子医療センター始動

総合周産期母子医療センター長

満留 昭久



クシテムを構築する。

・地域の医療機関の医師、助産婦、看護婦(士)に対し、周産期医療に必要な専門的・基礎的知識、技術を習得させるため研修をおこなう。

このため病床数に応じた専任の医師、看護婦(士)の常勤を義務づけられ、情報収集等の任務のための事務職員が必要とされます。

わが福岡大病院の総合周産期母子医療センターは、センター長のもとに産科医、小児科医および麻酔科、小児外科、脳外科、眼科、泌尿器科、精神科の医師および看護婦から構成され平成十年十二月からスタートしました。現在セ

ンター専任の医師は二名で他は兼任ですが、国および県の設定基準を考えるとさらに専任のスタッフを充実していかなければなりません。

今後二、三年の間にわがセンターを中心に福岡県の周産期医療のネットワークシステムが完成していくことになり、私共は福岡県の周産期医療の中心的役割を担うこととなります。産科、小児科だけでなく、多くの診療科の協力を得て福岡大学病院の特色あるユニットのひとつとして大きく成長していくことを期待しています。皆様のご支援をお願いします。

長い間

ありがとう

ございました

（平成十年四月一日）

十二月三十一日退職の方

久野 修資 講師〔内科第二〕

平林堂病院へ

岡部 信郎 講師 〔内科第二〕

内科消化器科医院へ

岡部 眞典 講師 〔内科第二〕

云福岡総合病院へ

緒方 公介 教授 [整形外科学]

（平成十年十二月三十一日付）

〔緒方教授関連記事は二面に掲載〕

平成十年十二月三十一日、整形外科 緒方公介教授が肺癌のため五十二歳で逝去されました。
平成十一年一月二十四日に行われた葬儀における池原医学部長の追悼の辞を掲載します。
(以下原文のまま)

緒方公介教授 御逝去

～心より 御冥福をお祈りします～



故 緒方公介教授

弔 辞

故緒方公介教授の御霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

つい三か月前まで、ここに飾られたお写真そのまゝの若々しいお顔と接していた私には、未だに緒方先生が亡くなられたことが信じられない気持ち一杯であります。

貴方が「ちょっと話があるから」と言ってお部屋にいられたのは昨年の十月五日のことでした。一瞬時が凍りついたようなそのときの鮮烈な印象を私は決して忘れることができません。「自分はどうも肺がんのようだ、しかも両方の肺にあるので手遅れだろう、このまま入院すれば学部長に再び会う機会もなくなりそうなので、今日挨拶に来ました」とおっしゃいました。

つい先日まで朝はやく元気にテニスをやる姿を拝見していただけに、私はあまりに突然の信じ難い話の内容にただただ驚くばかりでありました。自分の運命を悟った上で淡々と話される貴方を目の前にして、私の口から出る言葉は慰めにも、励ましにもならず、ただ奇跡あることを祈るばかりでありました。

五十二歳という働き盛りの真つただ中に、その生涯を閉じられた緒方先生のこれまでの生き様は、斬新な意欲と行動力に満ちあふれたものでし

た。九州大学医学部を卒業されると同時に同大学整形外科学教室に入局されましたが、まもなく昭和四十九年にアメリカに留学され、昭和五十四年まで五年間あまり臨床医として修練されました。インテリゲンシアから始られて、ワシントン大学医学部整形外科のレジデント、講師、さらにベテランス・アドミニストレーション・ホスピタルの整形外科部長を併任されました。その後、九州大学に戻られ講師として活躍しておられたのが、平成三年十月に福岡大学医学部整形外科の主任教授として赴任していただきました。

赴任当時四十四歳であった先生は、まさに新進気鋭の若手教授として、診療、研究、教育に全力を傾注されてきました。先生のご専門は膝関節の疾患であります。その経験の豊富さと治療的確さに、福岡県内は勿論のこと、全国から多くの患者さんが先生のもとに紹介されるようになりました。

若いときにアメリカで磨かれた臨床手腕と合理的なものの考え方は、教室員の指導をはじめ、ひろく教室運営に反映され、その魅力ある指導ぶりに引かれて、整形外科学教室へ入局を希望する卒業生が殺到しました。赴任以来これまで七年間の入局者は七十名の多きに達しています。

医療技術の進歩は綿密に計画された研究の積み重ねによってもたらされます。先生はまさにその実践者であり、常に陣頭にたつて臨床治療の改善を目指した指導を指し示して来られました。そのため多くの教室員が大学院進学を希望し、毎年その定員枠をオーバーする状態でした。入院中にお見舞いに伺ったとき、「今年度修了予定の大学院生の学位審査は是非自分の責任でや

りたい」とおっしゃっていました。先生は、遂に果たし得なかった先生の無念な思いを、私もはたはた推しはかることしか出来ません。

先生はまた、日本整形外科学会理事、文部省学術審議会専門委員をはじめ、関連学会の数多くの役職を務められ、これら益々その活躍が期待されているところでした。このように学内活動、学外活動のあらゆる面で、今まさに油の乗りきったときに、その志の完成を俟たずして先生を奪い去った運命の苛酷さに対し、私どもは何と小さな力しか持たなかったことでし

よう。悔やんでも悔やみ切れないうちにあります。しかし、その志は先生の薫陶のもとにたくましく育ってきた教室員によって必ずや受け継がれていくと確信いたします。

福岡大学医学部・病院に果たされた先生のはかりしれない貢献に対し、ここに改めて深く感謝申し上げます。お別れの言葉といたします。

福岡大学医学部長
池原征夫



新 風

平成10年10月1日付で本学へ赴任、または昇格された方に自己紹介をしていただきました。

教室紹介

微生物学教室

当教室は昭和四十九年四月に開設され、天児和暢先生が初代教授に、昭和五十八年四月から第二代理教授として、岡田秀親先生が就任されました。平成元年四月からは、永山在明先生を第三代理教授に迎えて現在に至っています。現在、永山教授、黒岩助教授、安仲講師、助手二名、教育技術職員一名のスタッフと、大学院生四名、研究員一名、当教室が担当する教育はM3前期にあります。教育目標は、学生が病原

研究面では、性行為感染症(STD)として蔓延しているクラミジアの感染様式や、病原細菌の薬剤耐性のメカニズムについて(特にメチシリン耐性黄色ブドウ球菌や、バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌について)、形態学的、分子生物学的手法を用いて精力的に研究しています。また生体側の立場から、加齢や運動による防御機構の変化を、食細胞やキラーT細胞の機能を中心として解析しています。これらの研究のために、当教室員のみならず、医学部内の他教室、他学部、あるいは他大学の研究者達との共同研究も活発に行っています。成果は国内は勿論、国際学会で毎年誰かが発表しています。

毎週月曜日には教室ゼミナールが開かれています。これには他教室の方も参加して討論しています。大学院生に



公衆衛生学助教授 福岡哲仁



私は、島根県の中国山地の山間の町に生まれ育ち、将来の仕事として地域で、人々の生活に近いところで医療をしたいと考え、地元の島根医科大学に入学しました。入学した当初は、ただ漠然と「僻地医療」「イコール」「地域医療」というイメージで、今から考えると気持ちだけで具体性のないものだったように思います。ただ、この気持ちだけは今も変わらないと思っております。在学中に、もっと「地域医療」について勉強したいと考え、大学院生としてさらに四年間予防医学を学ぶこと

にしました。この四年間に多くの人々との出会いがあり、私の進路も少しずつ変化し、ついに米国留学を機会に大学の教育スタッフとして働くことになりました。大学院修了後は臨床に進もうと考えておりましたので、ずいぶん悩んだの選択でした。「教えるとは、ともに未来をかなること。学ぶとは、誠実を胸に刻むこと」と既ににお亡くなりになった恩師の言葉が思い出され、医学教育の中で自分の夢も実現できると信じて決心しました。

研究は、私たちのライフスタイルや生活環境が健康に及ぼす影響をどのようにコントロールしていくのか、その方策をコミュニケーションの中で見いだすことをライフワークとしてのテーマにしています。

福岡で教育と研究に力を注ぎ、少しでも福岡大学の、日本の医学の発展に貢献できるよう努力したいと考えております。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

筑紫病院内科第一助教授
諸江 一男



知つての Torsades de Pointes (TdP) でした。当時は、今ほど有名でなく、当然私も無知であったため治療に悩みました。しかし、この患者は房室ブロックを伴っていたので、ペーシングを行ったところTdPは消失しました。後にTdPの治療がペーシングであることを知り感動しました。TdPとの出会いが、私の生きる道を決めたと言っても過言ではなく、TdPの実験モデルを作製すべく始めた動物実験の房室ブロック作製が学位論文となり、更にこの方法が、現在の臨床におけるカテーテル焼灼術に結びつくであろう事は当時は思いもよらなかった。この患者は、永久ペースメーカーを植込み、二年前に九十一歳でペースメーカーの交換を受け、今でもお元気であります。この患者との出会いにより、私の不整脈との付き合いが始まり、米国マイアミのマイアミ心臓研究所でリスター・ゴスリン両博士の元で二年間の臨床不整脈のトレーニングを受け帰国後は、福岡大学病院第二内科さらに平成五年からは福岡大学筑紫病院第一内科・広木教授の元でカテーテル・アブレーション、ペースメーカーなど不整脈治療を行っております。今後も患者一人一人を大切に、患者の身になった医療、患者を肉親と思うような医療を実践していきたいと思っております。今後とも宜しくお願い致します。

第25回医学部慰霊祭



第二十五回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、御遺族並びに御来賓の方々、本学教職員と学生約五百名が参列し、平成十年十月十七日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された三十四柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた百四柱、合わせて百三十八柱でした。献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、池原征夫医学部長は祭詞の中で、医学の発展のため欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに「私どもは、日々花を供え、香をたいて百三十八柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御意志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することを誓ひ致します」と新たな誓いを披露されました。

筑紫病院整形外科助教 塩田 悦仁



平成十年十月より、筑紫病院整形外科に赴任しております。これまで救急を扱う一般病院に長く勤務しており、新しい環境に適応するのに時間がかかりましたが、ようやく慣れて参りました。

私は昭和五十五年鹿児島大学の卒業ですが、もともと実家は北九州で卒後九州大学整形外科教室に入局しました。早いもので医師になつてすでに二十年が経過しましたが、その前半十年は研究、後半十年はもっぱら臨床に携わっており、研究テーマは骨代謝で、学位論文は現在市販

薬理学講師 上野 伸哉



一九八七年九州大学医学部卒業し、同麻酔科に入局しました。一九八九年より四年間大学院生として、赤池紀夫教授(現九州大学生理)の主筆された東北大学医学部病態生体学講座にて過ごしました。

一九九三年より二年半セントルイスにあるワシントン大学医学部に留学。留学後、一九九六年より国立衛生試験所・薬理部を経て、一九九八年十月一日より、桂木猛先生主宰の薬理学教室にまいりました。卒後数年おきに転々とした感

救命救急医学講師 後藤 英一



大学卒業後、入局先を決めるにあたって、親父が内科で開業していたこともあり内科に入局するつもりでありましたが、まずは、急性期の呼吸・循環を中心とした病態生理や臨床薬理を勉強したくて麻酔科に入局しました。入局後は、福岡大病院麻酔科および北九州市立小倉病院麻酔科で臨床研修を終えた後、福大麻酔科、大阪回生病院麻酔科、福岡通信病院麻酔科、北九州市

立小倉病院麻酔科に出向し臨床麻酔に携わりました。その後の救急センターを経て平成四年より救命救急センターに所属しています。麻酔科在籍当時は、麻酔医のマンパワー不足や種々のモニターシステムに限りがあり、大学病院以外の施設では二、三例同時進行並列麻酔は当然といった「安全な麻酔」を無視した「危険な綱渡り麻酔」を行わざるを得ないことも度々あり、何度も冷や汗をかいたこともありま



教室紹介

脳神経外科学教室

当教室は、開講以来、朝長正道教授により主宰され、現在は福岡武雄教授、岡一成就教授、山本正昭講師および助手五名に加えて多くの教室員が在籍している。

教室の基本方針としては、何よりも患者さんを優先とする臨床重視の姿勢で、脳および脊髄疾患を対象とした外科診療、研究を行なっている。

臨床面では、年間の手術件数は約三〇〇例(救命救命センター症例を含む)あり、その内訳は脳腫瘍が約八〇例、脳動脈瘤、脳動脈静脈奇形などの脳血管障害が約五〇例、頭部外傷が約六〇例、脊髄脊髄疾患が約三〇例である。また頭蓋底手術、

血管内手術の導入や神経内視鏡の開発と臨床応用などの最先端の治療を行なっている。

1、脳腫瘍グループ：神経腫瘍に対しては可及的な摘出術を行い、悪性のものには術後に放射線・化学療法を行ない長期生存率の向上を目指している。またサイトカイン療法(TNF- α)を併用し、再発神経腫瘍の治療に取り組んでいる。下垂体腫瘍に対しては主として経蝶形骨洞腫瘍摘出術を行い、視力障害ならびに内分泌異常の改善に良好な結果を得ている。また従来、腫瘍が極めて困難とされる頭蓋底部腫瘍に対しては、形成外科、耳鼻科、眼科と協力して積極的な腫瘍切除の後に再建手術を行い、整容的、機能的に良好な結果を得ている。

2、脊髄グループ：頭蓋頸椎

移行部病変、脊椎後縦韌帯骨化症、変形性頸椎症、脊椎管狭窄症および脊髄腫瘍に対する外科療法を行なっている。

神経生理モニターを用いた安全な手術の確立と機能回復を目指した治療を行っている。

3、神経内視鏡グループ：多機能を有する治療型軟性神経内視鏡を開発し、水頭症や脳室内腫瘍に対しては侵襲の少ない手術に取り組んでいる。また早くから人工髄液に注目し、その開発に携わり臨床応用を行なっている。

4、脳血管外科グループ：脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血に対しては、早期クリッピング術を原則とし脳血管攣縮の予防、治療に努めている。また最近では脳動脈瘤に対するコイルによる脳血管内手術を導入している。未破裂脳動脈瘤の手術適応については年齢、動脈瘤の部位などを考慮して行なっている。さらに脳動脈静脈奇形や硬膜動静脈瘻は血管内外科の手法を用いて



(文責 木村 豪雄)

内科第一講師 青柳 邦彦



昭和五十八年に、尾前照雄先生(現国立循環器病センター1名譽総長)が主任教授であ

った九州大学第二内科に入局しました。二年間の内科一般研修(九大二内科・一内科、直方中央病院)の後、第二内科消化器研究室に所属して勉強してまいりました。この間、新日鐵八幡病院、福岡赤十字病院で臨床指導を受け、また、九州大学第二生化学で当時の水上茂樹教授(現名誉教授)、竹重公一朗助教授(現教授)より白血球の代謝について研究指導をしていただきました。

このたび、平成十年十月一日より福岡大学内科第一の消化器部門に所属するようになり、消化管の炎症性疾患と腫瘍を中心に緻密な診断と病態解析に基づいて研究と診療を行っていきたく考えています。

また、近年では、早期発見された消化管悪性腫瘍は内科で

も内視鏡を用いて治療できる時代になっていきますので、胃・大腸・食道それぞれの良・悪性腫瘍に対し内視鏡的治療を積極的にアプローチしているところです。

現在、福岡大学病院では次の時代をにらんで新しい枠組みと内容の充実を目指す時期にさしかかっており、教育、研究、診療のいずれにおいても、なお一層の努力をしたいと考えています。

今後ともよろしくお願い申し上げます。



救命救急センター講師 谷川 攻一



この度、昇格人事を頂き、深く感謝しております。

私は昭和五十七年九州大学医学部卒業後、産業医科大学麻酔科学教室(重松昭生教授)に入局し医師としてのスタートを切りました。産業医科大学での研修の後、九州厚生年金病院福岡留置科麻酔科部長、済生会八幡総合病院(合屋忠信院長)にて臨床医としての経験を積み、米国ピッツバーグ大学集中治療部(Professor Ake Grenvik & Peter Sagar)では外傷および臓器移植を中心とした重症患者治療、心肺蘇生研究に携わって参りました。そして救命救急九州研修所にて救命救急士教育に三年間従事した後に、昨年四月より福岡大学病院救命救急センター田中経一教授のもとにお世話になっております。

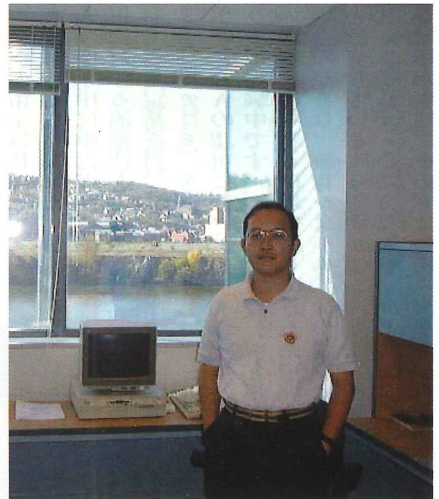
救命救急士は時と場所そして医師を選ばぬが故に、すべての医師が適切な救命医学の知識技術を身につけるべし、との信念のもとに、現在、福岡大学医学部学生教育の機会を頂いております。また、患者診療および臨床研究につきましましては、心肺蘇生率の向上、重症患者における多臓器不全の予防を自分の課題としております。一方、プレホスピタルケアを担う救命救急隊員も救命救急センターの重要な役割であると考えており、救命隊員教育にも積極的に関わっていきたく考えております。今後とも宜しくお願いいたします。

毎
外
だ
よ
り

University of Pittsburghの在外研究

外科学第二 岩崎 昭憲

平成十年六月から一年間の予定で人工臓器を中心としたアメリカでの存外研究の機会をいただきました。専門が胸部外科ということもあり、なかでも肺、心臓を対象にしております。現在はUniversity of PittsburghのBiotechnology Center内のArtificial Lung laboratoryで研究をしております。こちらを取り巻く環境と私自身が従事している研究について少し御報告をするこ



研究室my deskで

とに致します。人工臓器とはいうまでもなく、正常に機能しなくなった人体臓器の機能を代行させるための生体機能を代行装置と考えられます。ある時は一部または全部を代行することになります。

mechanicalなものとしては人工心臓、non-mechanicalなものとして人工肺、人工肝臓、人工脾臓、人工腎臓に分けることができます。人体は複雑で医学部だけでは人工臓器の研究には臨床応用はありえないと考えられます。そこでほとんどの大学や研究施設には医学と機械工学、化学工



市街と研究室方面を望む

近い将来の臨床応用に向けて研究が進んでいるところです。今のところ急性肺障害患者を対象にしていますが、長期使用が可能になれば慢性呼吸不全患者や肺移植対象患者の移植までのbridgeとして応用できるものと思います。幸いに日本ではまだこの分野での研究はほとんど始まっておらず、この存外研究で私なりの人工肺の新しい研究を推進できるようにと考えております。

最後になりましたがこのような研究の機会を与えていただいた福岡大学、大学医学部、病院ならびに教室の皆様に感謝いたします。

第40回福岡大学医学会例会【報告】

日時 平成11年3月3日(水) 17時から
場所 福岡大学医学部臨床大講堂

- | | | | | |
|------------|---------|----|----|----|
| 1. 開会の辞 | 庶務幹事 | 金岡 | 毅 | 教授 |
| 2. 会長挨拶 | 医学会会長 | 池原 | 征夫 | 教授 |
| 3. 優秀論文賞授与 | | | | |
| 説 明 | 総合研究所委員 | 宮内 | 亮輔 | 教授 |
| 授 与 | 医学会会長 | 池原 | 征夫 | 教授 |

Cytotoxic T Lymphocytes in HTLV-I Associated Lymphadenopathy; a Possibility of Immune Evasion in a Defective Virus 大島 孝一 氏

The Effect of Partial Posterior Cruciate Ligament Release and the Creation of a Posterior Slope of the Tibial Articular Surface on the Kinematics of the Knee after Total Knee Arthroplasty
城島 宏氏

4. 医学紀要優秀論文賞講演 [17:10~17:40]
司 会 総合研究所委員 宮内 亮輔 教授
大島 孝一 氏 城島 宏 氏

5. 福岡大学医学会賞講演 [17:40~19:00]
司 会 庶務幹事 金岡 毅 教授

Differences in the Angiogenesis of Benign and Malignant Ovarian Tumors, Demonstrated by Analyses of Color Doppler Ultrasound, Immunohistochemistry, and Microvessel Density 江本 精氏

Detection of Chromogranin A mRNA in Small Cell Lung Carcinoma Using a New, Highly Sensitive In Situ Hybridization Method with a Non-Radioisotope Oligonucleotide Probe
住吉 慶明 氏

Phosphorylation of the Vesicle Docking Protein p115 Regulates Its Association with the Golgi Membrane 相田 美和 氏

T-Stem Cell Leukemia/Lymphoma with Both Myeloid Lineage Conversion and T-Specific δ Recombination 長野 光之 氏

●お知らせ●

福岡大学病院ホームページが開設されました。

<http://www.med.fukuoka-u.ac.jp/hosp/> です。

なお、医学部のドメインネーム（ホームページのアドレス）も下記のように決定しましたので、今後こちらでアクセスすることをお勧めします。

福岡大学医学部 <http://www.med.fukuoka-u.ac.jp/>

学位取得

次の方は、平成十年十一月二十四日付で、福岡大学より医学博士を授与されました。

☆論文提出による学位取得者

上原 明〔生理學第一併任講師〕
相田 美和〔生化學第二助手〕
八尋眞一郎〔寄生蟲學助手〕
風川 清〔腦神經外科學助手〕
椎 教次〔泌尿器科學研究生〕
後藤 廣人〔學外〕
石井 俊也〔衛生學助手〕

次回の福岡大学医学会
総会及び例会は
平成十一年五月十九日（水）
に開催する予定です。

医学部に入學したのが一九八四年（ロス・オリンピックが開催された年）、医師免許を取得したのが一九九〇年（湾岸戦争が勃発した年）です。それで、大学院での研究期間も含めるとイシヤとしての経験は十年になろうとしています。たかが十年されど十年というところでしょうか？。『子』にしては育ちすぎでし、かといって『親』になるにはまだまだ未熟という半端な時期です。『親心・子心』の欄を執筆するには最も不適当な年代といわざるをえませんが、「とにかくマスメをうめろ」との厳命でしたので、ガラにもなく説教じみた話を、BSLがはじまるMS、受験勉強をはじめのMG、そして晴れて

国試に合格し研修医となった後輩諸君を対象に、ちよつとだけさせていただきます。クラブの先輩のコゴトのつもりで書いて下さい。

MS&BSLは学生時代の最大のヤマバ（event）とならないはず。MSまで既に勉強しているはずの基礎医学、臨床講義についてのほとんど全てを忘れていることに對して文句はいません。勉強についてガミガミいうのは教授の仕事でし、自分も無知でしたので言えるわけない。ただ、最低限のマナーは守ってほしいと思います。最近、病院のエレベーターに五、六人の学生さんがドヤドヤと乗込んでいくのをよく目にします。「学生はエレベーター使用禁

無意味。有害でさえあります。また、勉強せずに合格したといえは聞こえがいいので、そう吹聴する輩もいます。受験勉強に限っては先輩の話は「話半分」にきいていたほうがよさそうです。地道に普通に勉強していけば国家試験など合格するものですし、たとえ一回や二回失敗しても立派な医者になっている先輩が大勢いらつしやいます。

国家試験に合格したての若い研修医の皆さんは、とにかく指導医のもとで一生懸命に頑張つて下さい。各科でカリキュラムが違いますが普遍的にいえることは、患者さんの所見や検査値の変化を見逃さないよう努めることです。経験が乏しくても、貧血の進行・電解質の崩れくらいはデータをみればすぐにわかるし報告できるはずですよ。検査はオーダーしたものの目をおすのは回診の前晩では、オオメダマをくらうはめになること

止!」とはいませんが、点滴台をひっぱっている患者さんや荷物を抱えたお見舞いの方々が窮屈な思いをすることのないようにすべきでしょう。同様に、情報センターの、コピー機をノートコピーに使う学生さんにはしばしば気付きます。ここは図書館資料だけのはずとメクジラたてるつもりはありませんが、雑誌・本を抱えて待っている先生方や秘書さんがいらつしやれば譲ってしかるべきと思います。

M65super B.S.I. が終った。たら本腰を入れて受験勉強にはいらなくては行けません。最初は受験雑誌や参考書を買って漁ったり、どこからともなく入ってくる怪情報に惑わされたりとなんとなく落ち着きません。先輩にアドバイスを求めるのもいいでしょうが、その際、各々のレベルにあった先輩に尋ねてください。自分は何も知らないくせに賢かつた先輩の話を聞いても全く

必至です。多くの先輩・同輩が「最初の二・三年が勝負、医者になってのひとつのヤマ」と証言していますので頑張ってください。

書いていて恥ずかしく、なさけなくなるほど当たり前の些細な事ばかりになってしまいました。最近の医学界では患者さんの取り違えが起くる一方、脳死からの臓器移植といった話題もあり世間の注目度が高いようです。実際に私も仕事仲間以外の友達と接する機会が多く、医学関係のニュースについては詳細を尋ねられ、ついでに「福大病院は……」と話が及ぶこともしばしばです。学生さんや研修医の先生方にエラソーに説教するともに、ぼちぼち中堅の自域にさしかかる十年選手の自分自身も、気をひきしめて日頃の診療・教育・研究にあたらなくてはと思いつつ駄文を終わらせていただきます。

『親心・子心』(20)

病態構造系大学院生 立川 裕